

第3回時計台対話集会

アンケートより

毎回この集会では、参加者にアンケートをお願いしていますが、今回も参加者の60%近くの人よりアンケートを提出していただきました。今年の参加者の特徴としては、初めて参加された方の割合が63%と高かったこと、男性の参加が79%と圧倒的に多かったこと、北海道から沖縄まで16道府県に及んだこと等があげられます。しかし、大学生と高校生は合わせて10%と例年どおり低い割合であったのは残念でした。対話集会を何で知ったかという問いでは、友人・知人からが25%と、ダイレクトメール(22%)、チラシ(20%)、ポスター(15%)を上回り、人づてに対話集会が広がっていることを知り、うれしく感じています。

アンケートによりますと「よかった」(47%)、「非常によかった」(41%)と90%近くの皆さんより評価を受けたことはうれしい限りですが、今後に向けて的確で厳しい意見も見受けられました。沢山寄せられた御意見の中から、紙面の都合で、代表的な意見のみを拾い出し、掲載させていただきます。

○対話集会(全体)についての意見・感想

●広い目で森里海を見直す。また、その目で見える良い機会となりました。

●対話として成立させるには、会場からの提言にも耳を傾け

ることが大切だと考えます(他のシンポジウムではこのようなことに配慮されています)。

●森里海の関連が議論されなかったのが残念。

●森里海という広い視野で捉え直すことに、細分化されたも

のを統合すること、そこに新しさがあり、魅力を感じて参加したのですが、基調対談以降は、従来の森里の問題に留まるものであったことが残念で、今後はその点の再見をお願いしたい。

●今回は「木」がメインのテーマだったので、次は「川」とか「海」に期待したい。

●この学問がどの方向へ行こうとしているのか見えない。学問としてのレベルが低いと感じた。日本を代表するようなきちんとした専門家を集めて参加してもらうべきである。

●障害者が自らの意志で iPod を選んだというお話が深く印象に残りました。

●海里の話が全くといいほど出てこなかったので、少々期待はずれだった。「森里海連環学」というよりは森林学では？あと、日本の木文化についてあまり語られなかったのでは？

●今まで何故日本の木が使われないのかを単に産業社会の責任にしていたが、そうではなく、林業にたずさわる者の意識が重要であることを改めて認識した。

●日本の林業の将来について危惧していましたが、様々な分野の方が国内産の材を使って行こうと努力されていることを知り、少し希望が見えてきました。一日も早く、日本の林業の復活と安く木造建築が見直されるよう祈っています。

●土木関係の技術者として生計をたてている私にとって、特に斜面防災（管理）の観点から興味を持って参加させていただいた。「木」の役割は生態系、人間の生活系にとつて改めてその重要性を痛感し、そして技術者としてどう考え行動しなければならぬかを認識させられた面白い半日でした。

●とても興味深いお話が聞けて良かったです。大学では森林について学ぼうと思っているので、参考になりました。

●農山村の崩壊という現実についての言及がなかったのが残念でした。今や高齢化し「限界集落」という用語があるように、かつて林業にたずさわった人々が消えてゆこうとしています。この問題を含めた山村・木文化の再生を模索しなければいけないのでしょうか。

●人工林の再生についての具体的なノウハウの研究は大変興味深い話でした。間伐の仕方を誤ると森を枯らすことになるというのは大変ショッキングでした。時間があまり残っていないと、いささか焦燥感に駆られます。

●尾池先生の砂防不要論大歓迎。連環を実行、促進する学問にしてほしいですね。「木の文化再生」というテーマは、個人的には少し違和感がありましたが、これは連環学の一部として理解できました。

●林業と木材利用については多方面からの話が聞けたが、“環境学”がどう関わるのかはよくわからなかったです。冒頭の対談では森里海のつながりのお話もありましたが、それが具体的にどう林業とつながっているのか、という部分が聞きたかったです。もうひとつは、実際のところ放棄人工林を抱える山持ちの側に、技術やシステムが進歩した場合に再び林業に取り組めるような人材的・設備的準備があるのか、というところが聞きたいです。成功している林業家の話を聞くチャンスはあっても実際に荒れた人工林を抱える林業家がどういう状況なのかなかなか見えないので。

●総長と村田社長の対談はもっと打ち合わせをしてからしていただきたかった。

●林業家として将来に光を見た感じがした。いろいろな立場の人の連携が新しい社会システムを作っていくと思った。

○講演についての意見・感想

●“森里海連環学”の講演だと初めて参加したが、三者の基本的な関係、どのように係わっているのか、明確に連環しているか教えてはしかった。客観的かつ具体的にどうなって、これから今までの反省をふまえて、どう対応すべきかを考えていくべき。

●村田製作所の社長さんに、改めて「蝶と自然」とのような話をお聞きたいと思いました。

●二つの話についてはわかりやすく、勉強になった。ただ森里海連環学とのつながりが今ひとつ、はつきりしていなかったような気がする。

○パネルディスカッションについての意見・感想

●パネルディスカッションが特に良かった。iPodの可能性を知り喜んでいきます。

●今回パネラーの方がおっしゃったことは先刻承知しております。補助金や政策誘導で地産地消しようとしても経済合理性から見て続かないと思います。

●四人のパネラーの方の話によつて日本の木材の変化がわかりました。昔は外国の木は心配でしたが、現在は輸入材がたくさん入っているようで安心しました。逆に日本の林野が心配であることを知った。

●パネルディスカッションの進行役がしゃべりすぎ、もっとパネラーの話を聞きたい。

●パネルディスカッションで建設的な話が展開されなかったのが残念。各々の方の知見は非常に興味深いものでした。

○自由意見

●近くの森の木を利用できるよう、利用できるシステムがつくれるように、現在、地方自治体の職員として関わっています。地域では、地域材を利用したいと考えている工務店の団体があり、何とか地域の素材業者、森林所有者と手をつないでもらえるように働きかけをしています。

●木造建築の家を多く目にする日が早く来てほしいと思うと同時に、本日のパネラーの皆様に頑張つてほしいと思います。

●環境保全問題は自分の生死に関わる身近な事柄として関心があります。私は外国に住み観光に関わる仕事をしましたが、今は世界の人に日本を紹介したいと思っています。ただ現在は飛行機代を出してまでわざわざ見に来るものは日本にはないと言われました(何度も日本に来ている外国人に)。江戸時代の日本を見た外国人は景観の美しさに感嘆したと読みました。
“森里海連環学”、日本「木文化」の再生は景観再生さらには観光にも結びつき連携できるように思います。そのことが大切です。
●よく企業がイメージアップをするために環境アピールとして、子供たちとビオトープを作るなどいろいろなことをされて

います。良いこととは思いますが、子供や私たち大人も技術がないと山を手入れすることは困難です。やはり減っている林業のプロを育てることを国や企業がバックアップしてくれればと思います。日本が自給で木材を使用するだけで、環境にいいのにと単純に考えています。大人が良い環境を作ることが子供たちの幸せにつながると 생각합니다。

●多様な方から、それぞれの現場に則した意見が聞け、また、現実の前に向かつて「みんなで生きていこうよ」という心が伝わってきました。

●“森里海連環学”は田中先生のお話のように、人類の文明の存続まで視野に入れた哲学的認識への探求も包括する大きな研究領域であると思います。過去の安田氏、C・W・ニコル氏、畠山氏など、多彩なパネラーの登場を今後も期待しています。
●ダムを作る金を森林保護にまわしてやれば若者も帰ってくるし、良材もとれ、木材価値も上がるのではないか。

●小林先生が言われていたように、皆が幸せになるための人のネットワークをいかに構築し、木の文化を再生するための新しい社会システムを作っていくのが大切と感じた。